

『夕凧LOOP』

無限

残されている時間は、
私を待つ答えは、
「無限」。

発売になったばかりの私のアルバム『夕凧LOOP』の中の、その名も「夕凧LOOP」という曲に、「無限」というキーワードが出てくる。私が書いた歌詞。

どこまでも広がっているという希望と同時に、あまりにも大き過ぎて、底の見えない谷のような恐ろしささえ感じるこのことば。だけど、足がすくみそうな感覚を覚えながらも、やはり「無限」こそ、この宇宙に定められたルールなのだろうとも思う。星はいつか爆発して最期を迎えるけれど、そのチリがまたゆっくりと集まってきて新しい星が生まれるのだという。そんなふうには、この世のすべては終わりと同時に始まりを迎える。

私たちをとりまく、無限のループ。生と死、朝と夜、出会いと別れ、終わりと始まり。その「何か」と「何か」の間にある、ほんの一瞬の隙間のことを何と呼んだらいいのでしょうか。

たとえば、夜が明けて朝になろうとする空を見ているときの、あの気持ち。何かとてつもなく大きな流れの中にいながら、その一瞬だけは風がびたりと止まったように静かで、厳かで。ふたつの間に挟まって、何者でもない自分になったような。あるいは、ふいに自分と世界のつながりを手に取って確かめてしまったような感触。

そういう隙間の一瞬は、いつだってとても美しく、さっきまでもやもやとしていた不安や、むやみに恐ろしかったことがすっと消化されていくような気がする。大海を小さなボートで渡っていたら、風が止んで波が止んで、鏡のように平らな水の上にぼっかり浮かんでいた、そんな感じ。

ループする世界。

終わりが無いという、救いと厳しさ。

どこまでいっても自分は自分であるという、喜びといらだち。

怖じ気づくこともあるけれど、きっと大丈夫。波は荒れたり、穏やかだったり、いろいろな表情を見せるけれど、ふと風が止まる瞬間が訪れる。そしてもういちどこの美しい世界を信じる勇気をくれる。

何度でも、何度でも。

エッセイ集「アイディ。」より

* maaya *